と云えるでしょう。之れが後に分離され、鈴木のゴム事業は日沙商会へと進展、続いて日輪ゴムの基盤づくりにも大いに貢献、豊祐なる学識は異色を放ち後輩の指導にも全力を挙げられました。

鈴木商店の解散後は尼崎にてゴム工場の自営に乗り出し、後、東洋紡と合併東洋ゴムの取締役を勤められました。終戦後の兄は伊藤忠ゴム化成顧問、岡山県新見化学工業を歴任、現在まで御活躍になりました。

資性高邁人に接せれるに恒に春風駘蕩、物数勘き中に親しみ易く誰れよりも尊敬の的となり、老涯とは見えぬ風貌の持主でありました。尚、わが辰巳会の開催に当っても殆ど欠かされることなく知友との歓談を愉しんでおられたことも目に浮んで参ります。又たつみ誌の御寄稿にも御協力賜りましたことも感謝の極みであります。

「たつみ誌」第五号、鈴木商店と再製ゴム。第七号、意気なお盛なり。第十号、産業国日本及産業者としての日本人。第十四号、神戸にある聖地。第二十二号、主義以然の世界観。第二十四号、日商の新館にのぼりて等何れも得がたき資料の遺稿となりましたことも遺憾に堪えません（御参読を乞う）

又御生前中はからずも筆者が縁者の和泉大津美術館にある秘蔵の大燈国師の墨書を御紹介申し上げたところ、非常に欣ばれ屡々館の門を叩かれました。尚、正木館長との交友も最近迄続き、毎年十二月の大阪中島公会堂の会館主催の美術講演会にもノート持参、熱心に聴講されましたことも忘れぬ思出となりました。

この度、足立大兄の天上に召されたことに就いては痛恨に堪えませんが、翻ってあなたの地上にのこされた学ぶべき数々の御足跡はわが胸に不滅の光明となりましたことを、御冥福を祈りながら感謝するものであります。

懸崖の青蔦廻廊の石甦える

（柳田）

森本兎之助兄を弔す

隅田　栄

同郷土佐の先輩森本兎之助兄が、如月七日いでゆの街別府で八十三の生涯を閉じられた。愛妻益枝姉とたった一人の毅君の滂沱の涙痕を偲んで——喜びを人に与えてとこしえに逝けるみたまをはろかにおろがむ——私の弔電だった。嗚呼。高知市の上街通町に生まれ明治四十三年市商を出て鈴木に入り、下関支店、宇和島の日本酒類に力腕を揮い、同市会議長として政治にも鳳翼を伸ばして私設市長として盛名を馳せた。戦後別府に移って書画骨董の趣味がなりわいに転じて三十年に近く、その異風の性行ゆえに別府名物の一つとして全市に謳れての帰幽だった。金子翁の岳父は生家のすぐ近くで、傍士商店のチョン髷老として終生それを押し通したと亡兄からの少年時の思い出噺も耳朶に貽る。土佐人として「いごっそう」の疑り固まりそのままの土根性をフルに発揮し、色黒く精敢な、どちらかと言えばそれでいて優さ男風の通称「兎之す」の面俔と姿態は瞼に映像して髣髴する。亡兄の奇行と逸話は数限りもないが、先年別府市長が来訪して、近く市の公会堂で二千人の男女老人を集めて老人会を結成するので森本さん、あなたが会長になって挨拶をしてくれませんかと懇請するを直に答えて、市長よ、僕は今年息子が大学に入ったばかりで老人とは断じて思わん。青年団長を引き受けてくれと言うなら話は判る。早速引き受けて市長室に市長と同じ型の机を持ち込んで日参して、別府青年団を日本一の模範青年団にしてみせる。天下に号令する者は英雄也と古称するが大いに号令して身銭を切って市には迷惑をかけん。八十五になる迄は老人とは思わんので老人会には入らんと、まなじりを上げると市長はその剣幕に駭き、玄関を出て車に乗るなり、森本さん今日はいかれました、やられました。全くどうもと車窓に大笑して手を振って帰庁したとの便りがあった。正に森本兄あるがままの寸描の一こまでもある。三十九年九月の舞子ヴィラの観月会の席上、大正六年夏から翌七年の春迄の大阪支店麦酒部の小僧の私が、小僧大に語る長講？で金子翁鈴木入店の大恩人名伯楽傍士の番頭の岩本善助さんを伝え、第一次大戦直後の躍進鈴木を論じ、三菱を抜き、三井を凌駕して金子、柳田、西川の名コンビによる世界征覇の隆昌を説き、加えてお家さんのご葬儀の翌日に、栄町の旧鈴木事務所に桜ビールの福井源吉さんと森本兄が金子翁に招かれて朝の九時から夜の八時迄、翁が長年月の鈴木董督に纏わる秘事を語られて、今これを発表すると現存の人もあるので差し障りがある。自分の死後にせよと仰言られ、翁没後に筆を執るとの長文があったことにも言及した。しかし恐らくは㊙事項も多かったであろう、遂にそのことはなかった。森本兄、あなたの立場では書きにくいであろう。私は半年小僧である。小説風に書き流せるからと切願したが慮ってかそのままになってしまった。残念であり全くに惜しい。敗戦のドサクサの時、猫も杓子も国会に出た好機に、旧知の大磯白足袋、四十有年の親交の林譲治兄に乞うて土佐から衆院に推したかったが今は夢の又夢。賢謀秘策大いに持ち味を生かして、金光、北村、大屋の先達に協力して戻旧勤のチームワークで民論背に日比谷与論審判の府に言々火を吐いて颯爽として闘うそれを待望したに。令弟秀才の徳馬兄も一橋を出て鈴木紐育支店に勤め将来を嘱望されたが若くして去った。西班牙コトゴバの哲人セネカ、二千年の昔、人は生れ死すと言い、ローマの暴帝ネロの逆鱗に触れてその眼前に毒を仰いだ。人生朝露のさだめ、白寿を希んだこころの兄森本さん

ひょうご事件風俗史

<21>

執筆者（敬称略）

兵庫県警本部　草山　巌
同　新妻謹吾
同　西井俊行
サンケイ新聞　近藤英雄

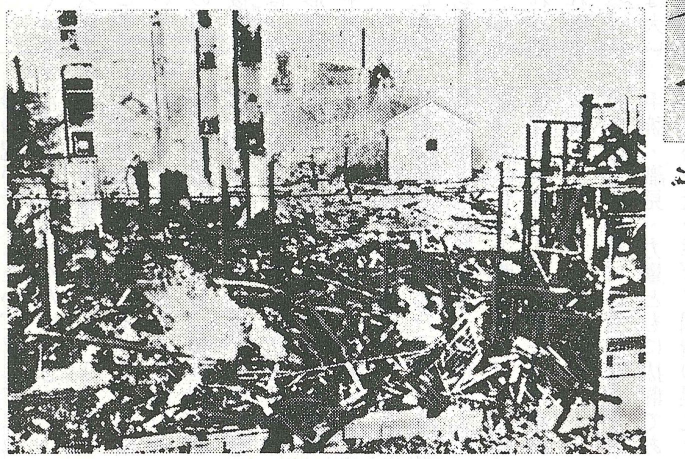
第一次世界大戦の戦争景気の中でインフレ傾向が進み、とくに米価は、値上がりを見越して買いだめをする者や、シベリヤ出兵を目前にした米商人の投機などが重なって、うなぎのぼりに高騰した。大正五年当時、一升二十銭までで買えたものが、大正七年八月には、三倍以上の六十三銭にはね上がった。

なにしろ巡査の初任給が十二円という時代のことである。たまりかねて米の安売りを求める大衆運動が全国各地におこり、強奪、放火という暴動に拡大していった。

世にいう〝米騒動〟である。県下における騒乱罪適用第一号であったこの騒動の中で起こった警官とデモ隊との間の、いかにも大正時代らしいエピソードを紹介しよう。

◇

奪われた剣を取り戻す



▲真夏の夜の悪夢…暴徒の放火であえなく焼け落ちた鈴木商店

冷静に暴徒を説得

米騒動の中で

米騒動二日目の大正七年八月十二日の神戸は、けわしい表情の警官隊による、物々しい警戒ぶりの中で暮れようとしていた。夕刻前の午時七時、すでに神戸市内全署の警察官が市内の要所要所を固めていた。この中の一人、相生橋警察署の鶴田竹次巡査部長は、十人の部下を率い、宇治川筋の元町寄りを警戒にあたった。

小一時間もたったころ、デモの一団が姿を見せた。

「鈴木だ、鈴木へ行け！」

だれかが叫んでいる。

デモ隊は東川崎町の鈴木商店へ向けて、一団また一団と、なだれのように駆けすぎていった。

やがて目標にされた鈴木商店から、ぐれんの炎があがった。

「放火だ！」

鶴田部長らは事の重大さに緊張した。

群衆の興奮は極点に達した。現場から引き返す者と南下する者とがハチ合わせして、宇治川筋は大混乱となった。混雑にまぎれて何が起こるかわからない。目を血走らせた鶴田部長は、受け持ちの警戒区域にくまなく神経をくばっていた。

◇

そのとき、夜目にも白く巡査の制服が、こちらへ走るのが見えた。

何かあった！　そう直感したとき、鶴田部長はもうその方へ走りだしていた。

一人の男が、刀身をかざして走ってくる。巡査の剣を奪ったらしい。鶴田部長の姿に気付くとその男は、デモ隊の中に走りこんだ。追いかけていた巡査も続いて割って入った。だが、たちまちその巡査は、殺気だった一団に取り囲まれてしまった。

袋だたき？　「待て」大声で叫びながらかけつけた鶴田部長は、巡査をかばって一団に向かいあった。

「巡査をどうしようというのだ」

「どうしようと勝手だ」

部長と一団のリーダーらしい男との間に、やりとりが始まった。

「安月給の巡査なら、わいらの苦しさもようわかるやろ…。ナマイキ言うな、説教なんか聞きとうないわ」

くちぐちにわめき立てるヤジにも、部長は冷静さを失わなかった。

「市民を守る巡査の剣を奪って何をするつもりなのか、苦しいからといって何をしてもいいという理屈はない。めいめいが勝手なことをすれば、世の中は地獄だ。オレの月収はたったの三十円だ。それでも歯を食いしばってガマンしている。世の中を地獄にしたくないからだ。そんなオレたちまでを敵視するのか」

じゅんじゅんと説く鶴田部長の声に、いつか反発の言葉も返ってこなくなった。そして、リーダーらしい男がポツリと言った。

「なるほど、これは言われるとおりや。おい、剣は返したれ」

剣は無事に戻された。

部長がその剣を巡査に渡してやったとき、周囲の一団は、もうデモ隊の中に入り、流れていた。

◇

これは米騒動という大きな事件の中のほんの一カットにすぎない。しかし、その中で、お互いの立場を越えて通い合う何かがある。ともすれば、対権力闘争の場にすりかえられがちな現代における〝断絶の治安警備〟を思うとき、それは六十年の年月がつくった、とり戻すことのできない距りなのであろうか。

（次回は「三菱・川崎の争議」を1日に掲載）

〈メ　モ〉

県下米騒動の決算

騒動は大正七年八月十一日から十五日の五日間に及んだが、十二日から十四日までが、最も激しかった。

神戸、尼崎、明石をはじめ、豊岡でも淡路でも、米屋を襲う事件が続出し、朝来郡でも神戸の騒動をまねて、村民を扇動する者があらわれている。

市街地の大きな被害だけで四十九件（神戸四十一、尼崎六、明石二）、そのうち放火による焼失が十九件、米穀の強奪が十九件であった。

これに伴っての検挙は二千百十七人にも達し、このうち千五百五十人が起訴された。

米騒動に出動した警察官は、三日目の十三日以降連日千六百人を超えている。実に全県下の警察官の七六％という動員率であった。しかもなお、警察の警備力だけではどうにも押えきれず、神戸をはじめ尼崎、明石には、いずれも軍隊が出動して鎮圧に当たったのである。如何に大きな騒動であったかが知れよう。

▲サンケイ新聞（昭和51年5月25日）

の長逝を悼んで胸奥は疼く。信貴山下ここ河内野にも細雨頻りに注いで自然は日増に永歎の色が濃い。同時に春窓一秋今昔を俯仰して人事の悲愁を聞くことの余りにも繁いことである。十幾年の前八尾市会議長の当時、九州視察の帰途、別府埠頭でハンカチしたが想えばこれが、とわの別れにはなった。兎之助さん、あなたは久遠の旅路に踏られました。もうお目に懸れませんね。しかし私は信じますよ。ご遺骸は一炷の娘煙と化しても、勝れたあなたの魂は必ずや天上の霊界に向上の一路を魁けていかれるであろうと。ご冥福を千祈し万願して切。

倬つゞね三尾の紅葉見しことも

◆隅田まささん

住居番号変更

住居表示制度の実施に伴い、昭和五十一年九月一日から左記の通り変更になります。住所録ご訂正下さい。

★〒554　大阪市此花区四貫島
二丁目十八番十六号